断絶・分断の時代に求められる「日本のこころ」――

なぜいま、二宮尊徳の「報徳思想」が求められるのか？

「今こそ住民が行政に頼らない仕組みを築き上げるとき。それには二宮尊徳の報徳思想を学ぶべきだ」――。こう訴えるのは元通産省生活産業局長で一般社団法人世界のための日本のこころセンター代表理事の土居征夫氏。学生時代から坐禅に勤しみ、現在は五感を大事にする運動に取り組んでいる土居氏は「日本のこころ」が失われていると警鐘を鳴らす。

答える人

世界のための
日本のこころセンター代表理事

土居　征夫

Doi Yukio

求められる希望のビジョン

――まずは通産省出身の土居さんが「世界のための日本のこころセンター」をつくった目的から聞かせてください。

土居　まずは日本が長い歴史の中で培ってきた「こころの文化」を取り戻すという目的があります。

日本のこころとは、「つながり」「自然との共生」「個と全体の調和」「おかげさまのこころ」といった、これからの社会や世界を構築していく希望のビジョンにつながるものです。

ところが今はそれらが見失われつつある。もともとこれらは我々日本人のこころの中にありました。日本のこころを育てたものの1つが「坐禅」です。

武道や日本美術、能、茶道といった目に見える文化財の裏にあるのがソフトウェアとしての「日本のこころ」です。これは口で話してもなかなか本当のところが伝わりません。体験を通じて生活の中から得るしかないのです。

――日本人が失いつつある日本のこころをもう一度、取り戻そうという趣旨ですね。

土居　ええ。実は、この日本のこころの奥深さを海外の人が気付き始めており、我々のところにも坐禅を体験しに来ているのです。戦後教育までは日本のこころは家族の中からそれとなく引き継がれていたのですが、戦後教育で育った世代になると、古くさい話になってしまい、それで断絶が起きてしまった。

ですから、我々は特に若い世代と一緒になって日本のこころを学ぶ機会をつくろうということで、この活動を始めました。

北朝鮮問題、中東やヨーロッパでの民族対立の拡大、米国での社会や政治の分断など、世界中で格差の拡大が広がっているわけですが、これからの人類社会には、このような不安を乗り越える希望のビジョンが必要になります。そのヒントが日本のこころの中にあるのではないでしょうか。

――日本のこころとは何かを考え、世界に発信していくと。

土居　はい。要するに、持続的発展やESG（環境・社会・ガバナンス）を頭の中で唱えているのではなく、心の中に入れ込んでいこうと。

チューブを使って発信したり、さらにはVR（仮想現実）も使おうと。

てはどんな人を挙げますか。

土居　例えば二宮尊徳です。

き）、「分度（ぶんど）」（身の丈に応じた収支計画を立てて）、「推譲（すいじょう）」（

あります。

日本のこころとは、「つながり」「自然との共生」「個と全体の調和」「おかげさまのこころ」といった、これからの社会や世界の中で、日本のこころとは何か、これからの社会や世界の中で話してもなかなか本当のところが伝わりません。体験を通じて生活の中から得るしかないのです。

――日本のこころとは何かを考え、世界に発信していくと。しょうか。

土居　はい。要するに、持続的発展やESG（環境・社会・ガバナンス）を頭の中で唱えているのではなく、むしろ一人ひとりが自分を振り返り、自信を持ち、主体性を確立していこうということです。

そもそも日本は過去1000年の間、厳しい天災や戦乱の世の中を経ながら、人々が何とか主体的な生き方を追求してきた国なのです。末世と言われながらも、日本人は自分たちのこころを鍛えて、明るく生きてきたという歴史があるのです。

ところが明治以降、それがおかしくなってきた。知識と論理（ロジック）だけで考える世界になってしまったのです。そこで、日本のこころをもう一度学ぼうということなのですが、上から目線で誰かが講義するという形ではいけません。世代を超えて学び合う方法として、インターネットとリアルの両方でやっていく必要があります。

例えばインターネットでホームページをつくったり、ツイッターやフェイスブック、ユーチューブを使って発信したり、さらにはVR（仮想現実）も使おうと検討中です。

一方、リアルでは講義を聴く場所や坐禅ができる畳のスペースなどを確保し、また、街中で学び合いのイベントを開催していこうと思っています。

国内外で見直される二宮尊徳

土居さんが考える日本のこころを体現している人としてはどんな人を挙げますか。

土居　例えば二宮尊徳です。尊徳の別名、二宮金次郎は幕末の三十数年間、江戸幕府からも取り立てられて、関東一円の農村を根っこから復活させた人物でもあります。

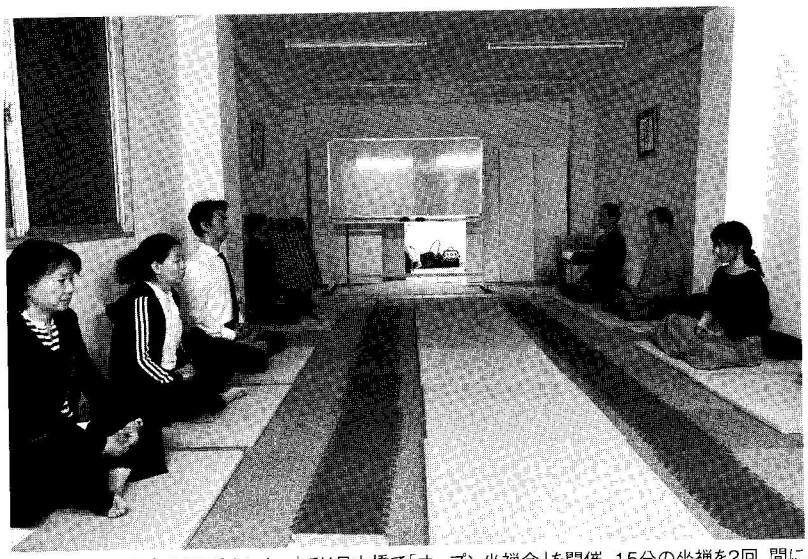
日本全体に蔓延していた行政の補助金依存型の政策を改め、住民が行政に頼らない仕組みを築き上げていったのです。

尊徳の主張は「至誠」（誠を尽くして）、「勤労」（真面目に働き）、「分度」（身の丈に応じた収支計画を立てて）、「推譲」（譲って損なく、奪って益なし）の4原則を含む「報徳思想」でした。

これは尊徳の故郷でもある神奈川県小田原市近辺から発しまして、栃木県日光市や静岡県掛川市、福島県相馬市など全国に広がっていきました。

他の自治体にも尊徳の教えが広まっていったのですか。

どい・ゆきお
1941年東京都出身。65年東京大学法学部卒業後、通商産業省（現経済産業省）入省。90年資源エネルギー庁石炭部長、92年中小企業庁次長、93年生活産業局長を経て、94年に退官。商工中金理事、NEC常務を経て、2004年以降、企業活力研究所理事長、城西大学イノベーションセンター所長、特任教授などを歴任。現在は日本信号顧問、武蔵野大学客員教授、世界のための日本のこころセンター代表理事を務める。



「世界のための日本のこころセンター」では日本橋で「オープン坐禅会」を開催。15分の坐禅を2回、間に経行を挟み、茶礼を行っている。忙しい日常の中、自分を見つめ直す場所となっている

に、福島県の旧相馬藩では60年計画が立てられ、10年ごとの目標を着実に達成してきました。明治政府には継承されませんでしたが、最初の幕末の20年間は目を見張るような復興がなされました。

戦後の例では、神奈川県開成町で、露木町長父子が親子二代で50年間の都市計画を進め、今では若い世代に人気があり、県西部地域で唯一人口が増えている都市をつくり上げました。手法としては「積小為大」、つまり、着実に、勤勉に、小さいことから始め、急がず我慢強く目的を達成する。急げば大事は乱れるというものです。

ところが、明治政府が発足すると、それまで幕府が進めていた取り組みは全て認めないという姿勢でしたので、この二宮方式も否定されたのです。

ただ、尊徳の手法は今どきの官民による中期計画が絵に描いた餅で終わるものとは違い、様々なところで引き継がれていきました。実は、そんな尊徳の手法に最近内閣府も着目し始めているのです。

神奈川県でスーパーを展開する経営者の取り組み

――その報徳思想のポイントはどんなところになりますか。

土居　尊徳の報徳思想において何の徳に報いるかというと、祖先や親、兄弟、先輩、大人など、子どもが育つ過程で恩を受けた人々になります。その受けた恩を次の世代に返していく。そういう思想です。

この報徳思想を汲んだ活動を地域で実践している方がいます。例えば神奈川県を営業基盤とする食品スーパー「ヤオマサ」を経営する名誉会長の田嶋享さんです。

――田嶋さんはどのような取り組みをしているのですか。

土居　田嶋さんは現在の日本社会が抱えている諸問題に対し、行政に頼るだけでなく、住民の立場で自ら発起して取り組みの輪を広げ、それが結果的に産業界や行政を巻き込む力になっているのです。例えば、認知症予防や食品ロスといった問題です。

通常であれば、このような問題は全て行政に任せるところですが、田嶋さんは認知症予防のためのカフェをつくったり、フードバンクを設立して製造工程で発生する規格外品などの食材を子どもたちに提供する子ども食堂をつくって食品ロスの解消を図るなど、行政の対応を待つのではなく、むしろ自分たちで行政に働きかけて社会問題の解決に取り組んでいます。

――これは本来、日本にはあったはずの思想だと。

土居　そうです。そもそも日本の中小企業政策の原点はこれでした。中小企業支援の根幹は金融対策で、中小企業は返すお金だという前提で、自立心を持って経営し返済していました。そこで返済された資金を中小企業庁が再投資するというサ

土居　ええ。尊徳は開発には確実に実施できると確信できる内容の長期計画が必要で、その計画に基づき、着実に実績を上げていくことが究極の目標を達成することにつながるという考え方を持っていました。

実際、尊徳の分度の思想を元一円へと広がっていったのです。

――まさに地方創世のモデ

徳の考え方を学ぶには？

土居　例えば、これまで企業

が来ます。五感を総動員して原

計画に基づき、着実に実績を上げていくことが究極の目標を達成することにつながるという考え方を持っていました。

実際、尊徳の分度の思想を元に、そこで返済された資金を中小企業庁が再投資するというサイクルです。しかしそれがいつしか補助金行政になっている。

しかし、尊徳は違います。尊徳は過去に遡って農村の財政を調べさせました。そこで例えば、100石の年貢を納めていた農村が20石しか納められていなかったら、武士の取り分の年貢を、まずは中間値をとって40石に抑え、農民に開発資金を回して生産を10年かけて40石に増やす計画を定めます。

10年かけて収支がとんとんになるように、荒れ地を開墾したり、水路を引いたり再開発して、逃げた農民に帰ってきてもらったのです。

もともと100石分の年貢を納めていたのですから、必ず40石にまで回復させることができるはずだと。その代わり、武士にも倹約をしてもらいます。長期にわたる計画を定めて少しずつ成果を積み上げていく。この取り組みは他の農村にも波及していきました。その結果、関東一円へと広がっていったのです。

――まさに地方創世のモデルケースとも言えますね。

土居　はい。尊徳の素晴らしさは、そのこころにあります。尊徳は自分の教えを薬効に例えて「神儒仏正味一粒丸」と呼び、自らの手法で不利を被る武士階級を味方につけるのです。

尊徳はこの「敵を味方にするこころ」で武士の抵抗を乗り切った。尊徳は成田山新勝寺で断食修行（阿宇観の坐禅）が明けて、物事の両面を見る一円観で全ての人を味方にする境地を得ました。

いま、この尊徳の存在を知った中国人の留学生が続々と尊徳の故郷・小田原に来ています。中国が儒教で復権しようとしている中で、本物の儒教が小田原にあると聞きつけて学生たちが足を運んでいるんです。それなのに、日本人は尊徳のことをあまりにも知りません。

五感を磨く意味

――では、日本の企業が尊徳の考え方を学ぶには？

土居　例えば、これまで企業や地域活動の中に「五感塾」というものがありました。五感とは論理を使いません。頭の中の脳を使って考えることを意識と言うのに対し、目で見て目で分かる。耳で聞いて耳で分かるといった五感のフル活用が大事なのです。

論理だけでは絶対に分からない世界があり、五感を使うと、より世界が分かり、人間が分かり、自然が分かる。したがって、幼児のときから座学だけではなく、五感を鍛えるアウトドア教育が大事になります。

当センターでは8月にサマーキャンプ、スウェーデンのアウトドア教育を専門とする西浦和樹先生にナビゲーターを務めていただき、1泊2日で宮城県の白石蔵王でキャンプを行います。

――アウトドア教育が五感を養うことにつながるわけですか。

土居　はい。そもそも心理の世界では、五感の次には無意識が来ます。五感を総動員して原点に戻ると、こころの状態は赤ん坊のような状態に戻っていくと言われているのです。

人間の中には無意識の層があり、その一番浅いところには自己防衛の意識がある。これは「末那識」と呼ばれます。この無意識は生存本能です。ですから、人間はいざとなったら戦争をやるわけです。

ところが、その奥には「阿頼耶識」と呼ばれる層があり、助け合いや慈悲のこころが出てくると言われています。人間はこの両方を持っている。両方を悟ったら、戻ってくる場所は直感になります。この赤ん坊の状態における究極の直感が素晴らしいのです。

当センターはそんな自分のこころの再発見がミッションです。何か新しく付け加えるというよりも、原点に戻って日本のこころを見つめ直す。日本人が苦労を重ねて積み上げてきたアイデンティティをもう一度見直すことが大事なのです。

ところが、明治政府が発足すると、それまで幕府が進めていた取り組みは全て認めないという姿勢でしたので、この二宮方式も否定されたのです。

――まさに地方創世のモデルケースとも言えますね。

土居　はい。尊徳の素晴らしさは、そのこころにあります。尊徳は自分の教えを薬効に例えて「神儒仏正味一粒丸」と呼び、自らの手法で不利を被る武士階級を味方につけるのです。

尊徳はこの「敵を味方にするこころ」で武士の抵抗を乗り切った。尊徳は成田山新勝寺で断食修行（阿宇観の坐禅）が明けて、物事の両面を見る一円観で全ての人を味方にする境地を得ました。

いま、この尊徳の存在を知った中国人の留学生が続々と尊徳の故郷・小田原に来ています。中国が儒教で復権しようとしている中で、本物の儒教が小田原にあると聞きつけて学生たちが足を運んでいるんです。それなのに、日本人は尊徳のことをあまりにも知りません。

五感を磨く意味

――では、日本の企業が尊徳の考え方を学ぶには？

土居　例えば、これまで企業や地域活動の中に「五感塾」というものがありました。五感とは論理を使いません。頭の中の脳を使って考えることを意識と言うのに対し、目で見て目で分かる。耳で聞いて耳で分かるといった五感のフル活用が大事なのです。

論理だけでは絶対に分からない世界があり、五感を使うと、より世界が分かり、人間が分かり、自然が分かる。したがって、幼児のときから座学だけではなく、五感を鍛えるアウトドア教育が大事になります。

当センターでは8月にサマーキャンプ、スウェーデンのアウトドア教育を専門とする西浦和樹先生にナビゲーターを務めていただき、1泊2日で宮城県の白石蔵王でキャンプを行います。

――アウトドア教育が五感を養うことにつながるわけですか。

土居　はい。そもそも心理の世界では、五感の次には無意識が来ます。五感を総動員して原点に戻ると、こころの状態は赤ん坊のような状態に戻っていくと言われているのです。

人間の中には無意識の層があり、その一番浅いところには自己防衛の意識がある。これは「末那識」と呼ばれます。この無意識は生存本能です。ですから、人間はいざとなったら戦争をやるわけです。

ところが、その奥には「阿頼耶識」と呼ばれる層があり、助け合いや慈悲のこころが出てくると言われています。人間はこの両方を持っている。両方を悟ったら、戻ってくる場所は直感になります。この赤ん坊の状態における究極の直感が素晴らしいのです。

当センターはそんな自分のこころの再発見がミッションです。何か新しく付け加えるというよりも、原点に戻って日本のこころを見つめ直す。日本人が苦労を重ねて積み上げてきたアイデンティティをもう一度見直すことが大事なのです。

――田嶋さんはどのような取り組みをしているのですか。

土居　田嶋さんは現在の日本の中小企業政策の原点はこれでした。中小企業支援の根幹は金融対策で、中小企業は返すお金だという前提で、自立心を持って経営し返済していました。